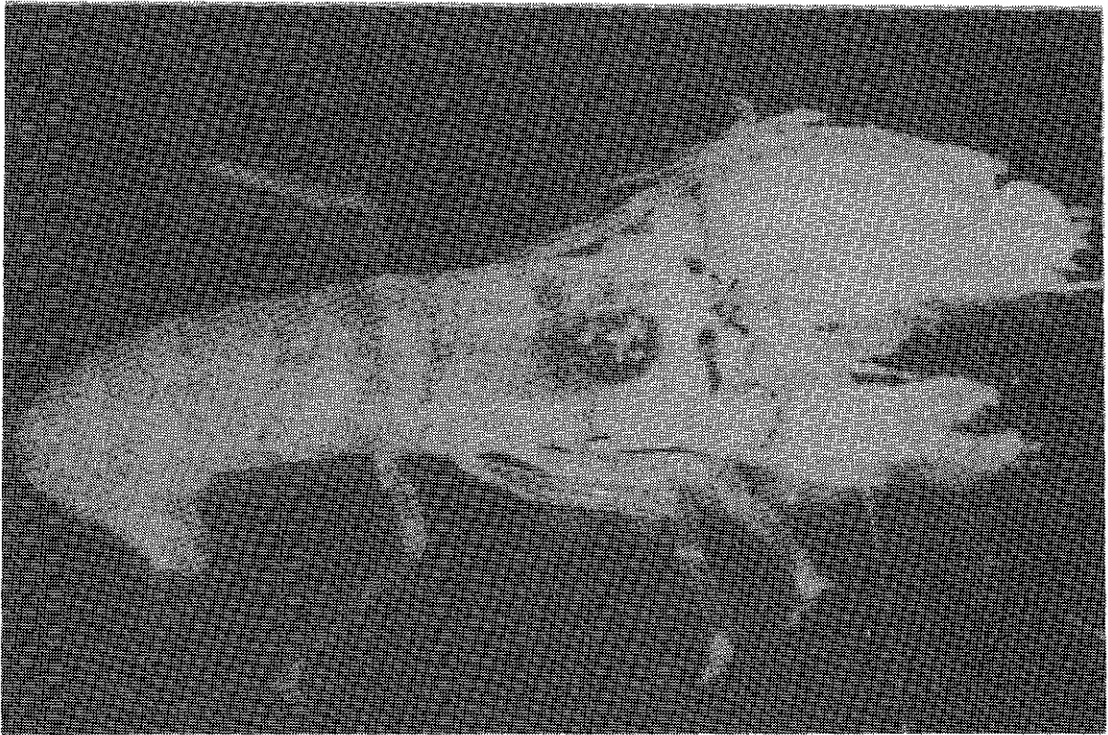


串本海中公園 マリナパビリオン

1997. 2.

Vol. 26, No. 2



オカメテッポウエビ

Metalpheus paragracilis Coutière

オカメテッポウエビ属は眼棘を欠き、大鉗脚指部に発音構造（臼歯状の噛み合わせ）を持つ。外見はテッポウエビ属 *Alpheus* によく似るため、しばしば混同されるが、本属は特化した口器（特に第3顎脚は幅広く他の口器を被う）を持つ点でテッポウエビ属と区別される。

本種は世界中の浅海熱帯域に広く分布し、日本では串本以南の黒潮流域に棲息する。体長20mm程度の小型種で、色彩には変異があるが、普通、体の背面に褐色の網目模様がある。日本では他に1種、トゲナシオカメテッポウエビ *M. rostratipes* が沖縄のサンゴ礁域から知られるが、この種は第3胸脚長節末縁の棘を欠く（和名の由来）ことで本種と容易に識別される。

写真の個体は、串本町潮岬沖に入れられたイセエビ刺し網に羅網した、死んだサンゴ骨格中より採集された体長約15mmの雄。テッポウエビ科。

K. N.

串本海中公園センター

いそこじき -18-

串本産稀魚の紹介

御前 洋

定置網やイセエビ刺し網などで漁獲された魚を調べたところ、本州での初記録種もしくは串本で捕獲例のない魚種が捕獲されていたので紹介する。なお、魚種の同定・分布域等については、日本産魚類図鑑（益田他, 1988）、日本産魚類検索（仲坊他, 1993）を参考にした。

1. アミメウツボ

Gymnothorax pseudothyrsoides (Bleeker)

1995年2月20日、串本町潮岬の海底に仕掛けられたウツボ籠で捕獲された（全長834mm）。捕獲当時の記録や写真から体色は頭部から尾部にかけて淡褐色の地に細かな褐色斑点が散在、吻端から眼にかけては暗赤褐色、鰓穴付近から後部は褐色斑紋が3~4縦列見られ、尾部末端付近は褐色の地に細かな網目模様であったことがわかったが、1年以上ホルマリン浸けにされた標本では吻端付近の暗赤褐色は残っているものの、他は一様に暗褐色で斑点や斑紋はほとんど消失していた。

吻端はやや丸く、それに続く上下顎は湾曲せず、口は完全に閉じられる。背鰭は鰓穴より前方から始まり、臀鰭は体のほぼ中央に開口する肛門の直ぐ後ろから始まり、共に尾部末端で尾鰭に繋がる。主上顎骨には鋸歯の無い鋭い歯が1列、前上顎骨中央には先の鋭い歯が2本、前助骨には前述の歯よりも小さな先の鈍い歯が6本ある。なお、同年6月串本町高富に仕掛けたウツボ籠で一度に9個体を捕獲、内6個体は現在も展示中である。本種の分布域は沖縄島以南となっているが、最近高知県柏島でも採集されている（平田他, 1996）。本州からの記録はない。

2. マルサヨリ

Hyporhamphus dussumieri (Valenciennes)

1995年11月17日、串本町大島に設置されてい

る定置網に入網した（全長135mm）。体は細長く、下顎は延長し頭長よりも長い。上顎長はその幅の0.7倍、先端はとがり、その背面には鱗がある。尾鰭は上葉よりも下葉が長く、またその湾入部は深く欠刻する。串本で時々水揚げされるナンヨウサヨリは体高が高く、断面は長楕円型であるのに対して、本種は体高が低く断面は楕円形である。本種の分布域は沖縄島、インド、西部太平洋となっており、本州からの記録はない。

3. タイワンガンゾウビラメ

Pseudorhombus levisquamis (Oshima)

1996年10月5日、串本町串本のエビ刺し網漁で捕獲された（全長278mm）。有眼側の体は褐色の地に楕円状をした淡褐色斑が多数散在し、胸鰭後部の側線上には周囲に斑点を施した眼径大の1黒色斑がある。無眼側は白色である。眼は体の左側にあり、腹鰭は6軟条、胸鰭は13軟条で、背鰭（80+軟条）と臀鰭（60+軟条）は軟条の一部が欠如している。

ガンゾウビラメに似るが、全ての体側鱗が楕円形であるのに対して、本種の体側鱗はほとんどが円形であることで区別できる。本種の分布域は高知県以南となっており、本州からの記録はない。

4. スミツキカノコ

Sargocentron melanospilos (Bleeker)

1996年10月19日、串本町潮岬沖に仕掛けられたエビ刺し網で捕獲された（全長210mm）。体は固い鱗で覆われ、前鰓蓋骨隅角部に強い一本の棘がある。体色は黄味を帯びた赤色で、頭部から尾部に向かって7本の白色縦帯がある。背鰭棘条部の起部と縁辺部、背鰭第1・2軟条間の鰭膜、尾鰭上下葉、及び腹鰭第1・2軟条間の鰭膜は鮮やかな赤色である。また背鰭と臀鰭の軟条部及び尾鰭の起部中央付近にそれぞれ1黒斑がある。なお本種は11月中旬串本町和深沖と12月11日串本町有田沖に仕掛けられたエビ刺し網で各1個体が捕獲されている（それぞれの全

長は160mm(標本無し)、177mm)。

本種の分布域は土佐湾以南となっており、本州での捕獲は初めてである。なお田辺湾に面した西牟婁郡南部町でエビ刺し網や底引き網、延縄などで漁獲される魚類を調べておられる池田博美氏からの情報では、昨年数個体捕獲されたという。

5. カイエビス

Ostichthys kaianus (Günther)

1996年11月4日、潮岬沖で地元漁師により釣り上げられた(全長307mm、尾鰭末端は一部欠如)。体は固い鱗で覆われているが、前鰓蓋骨隅角部に強い棘はない。体色は橙赤色で、頭部から尾部に向かって10本の白色縦帯がある。真横から見ると眼上部付近はやや突出する。背鰭は12棘13軟条で各棘は強靱、また鱗の表面は粗雑である。左右の鼻骨に挟まれた溝は吻端に向かって開いたV字形である。

串本のエビ刺し網で時々捕獲されるエビスダイに似るが、本種の背鰭棘状部中央における背鰭起部までの側線上方鱗数が3枚半であるのに対して、カイエビスでは2枚半であることで区別できる。本種の分布域は沖縄以南となっているが、既に白浜での捕獲例があり和歌山県南部に改訂されている(小西他、1994)。串本では初記録であるのでここに紹介した。

6. セダカハナアイゴ

Siganus sp.

1996年11月5日、串本町潮岬沖に仕掛けられたエビ刺し網で捕獲された(全長306mm)。体色はオリーブ色の地に黄色斑点と同斑紋が入り交じった虫食い状の模様で、眼周辺や胸鰭上部後方には数本の黄色線(帯)がある。各鰭も体色同様の虫食い模様であるが、胸鰭は淡黄色である。胸鰭起部上方の鰓蓋後縁は暗褐色、また尾鰭後縁は淡黄色である。

真横から見ると本種の体形は横に長い楕円形で、眼上部はやや凹み、その後は吻端から眼上部にかけての延長線上よりも少し盛り上がる。

体の斑紋などはハナアイゴに非常に似るが、本種の方が体高が高いこと、吻端上部から背鰭基部前端にかけてほぼ直線であること、頭部背面には細長い黄色斑紋があることなどにより区別できる。しかしながら本種はハナアイゴとの違いについて分類学的には未解決であり、現在細部にわたって比較、検討されている魚種である。本種は11月21日串本町有田の漁港に持ち込まれたエビ刺し網でも1個体(全長298mm)が捕獲されている。

本種の分布域は琉球列島以南となっているが、本年1月20日発行された伊豆海洋公園通信(Vol. 8, No. 2)に、1996年9月串本町沖の岩礁上を泳ぐ本種がダイバーによって撮影された記事が掲載されている。本州での捕獲例は初めてである。

7. ニセクロホシエダイ

Lutjanus fulviflamma (Forsskal)

1996年12月9日、串本町大島に施設されている定置網で捕獲された(全長269mm)。体色は吻端から眼上部にかけては桃赤色、背側は褐色、腹側は淡褐色で、頭部から尾部に向かって6本の卵黄色縦帯があり、その内の1本は眼を横切る。また下顎、腹鰭、臀鰭、尾鰭も卵黄色である。背鰭は10棘13軟条で、体の中央よりやや後方の側線上に眼径大の1黒色斑がある。

クロホシエダイに似るが、背鰭軟条数や鰓耙数が本種の方が1~2少ないこと、また側頭部の鱗列数は1~2列であるのに対して本種は4~5列であることなどで区別できる。本種の分布域は琉球列島となっており、本州での捕獲は初めてである。なお池田博美氏によると、昨年西牟婁郡南部町のエビ刺し網で数個体捕獲されたという。

数年来続く黒潮の接岸によりこれらの魚が捕獲されたものと推察される。なお、貴重な情報をお寄せいただいた池田博美氏、標本を提供して下さった諸氏に御礼申し上げる。

ウミウシの特別展示を終えて

小寺 昌彦

今年は丑年ということで干支にちなんだウミウシの特別展示を「海のうしたち かわいいウミウシの仲間」と題して、平成8年12月22日から翌1月7日まで水族館入口ホールで行った。ウミウシとは一般に軟体動物腹足綱後鰓亜綱（以下後鰓類）のうちのドーリス目、タテジマウミウシ目、スギノハウミウシ目、ミノウミウシ目の4目を指す。これら4目のウミウシは殻が完全に退化しているのに対して、その他の後鰓類は普通の巻貝のように貝殻をもつものや殻が体内に埋まっているものが多い。

さて、ウミウシ展を行うのは2度目なので（本誌Vol. 14, pp. 10, 68）、ウミウシに加えて様々な後鰓類を広く展示するとともに、3枚のパネルによる簡単な説明と、これまでに全世界で発行された後鰓類の切手全種を紹介することで、展示内容を充実させた。

展示種は串本に産するものを自家採集することとし、スキューバ潜水を主体に、干潮時の磯やエビ刺し網による収集を行った。その結果、地元漁師により持ち込まれたものや展示水槽から発見されたものを合わせて、表1に示した32種の後鰓類（うち26種がウミウシ）が収集できた。このうち小さくて展示に向かないと思われる4種を除き、28種を展示した。

展示方法は12年前と同様にブランデーグラスなどを使った止水飼育とした。グラスは容量0.25～3.6ℓのものを15個用意し、底に透明なアクリル粒を敷いて、1～数個体のウミウシを入れた。また、大きすぎてグラスに入らないアメフラシ類やミカドウミウシは約210ℓのガラス水槽（上面濾過式）を用意し、まとめて展示した。なおグラスの飼育水は酸素の欠乏やウミウシの出す粘液による水質の悪化を防ぐために、毎朝夕、アクリル粒とともに全部交換した。

短期間であったがウミウシの止水飼育をして気づいたことは、イボウミウシ類の粘液の多さと匂いである。飼育水の交換時、他のウミウシ

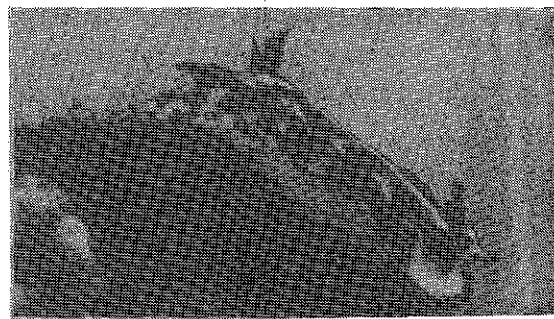
ではグラスの海水を入れ替えるだけでよかったが、イボウミウシ類ではグラスの内側を擦って粘液を除去する必要がある。また、キイロイボウミウシを除く3種のイボウミウシ類では鼻をつく何とも言えない悪臭がした。

なお、グラス内の水温は開館中開放した玄関の近くでも18℃前後を保っていたが、期間後半に外の寒さが増すと一気に低下し、最低10.8℃まで下がった（夜間は13.6℃）。飼育期間中に萎縮する個体も見られ、その原因は無給餌にあると考えたが、特別展終了後に予備槽（水温18℃前後）に移すと、これらの多くで回復が見られたことから、低水温も萎縮の原因の1つになっていたものと思われた。

表1に示した通り、期間中の展示個体の死亡は5種6個体と少なかった。そのうちアオモウミウシ科の一種はミスガイと同居させた次の日（採集から10日後）に死んでおり、ミスガイとの相性が悪かったと考えられる。他の5個体のウミウシは採集から25～41日後に死亡しており、無給餌が死亡理由の1つと考えられる。なお、水温が低下した後に死んだものがないので、水温の低下が直接の死亡理由となったものはないと思われる。

なお、特別展示終了後、種不明のウミウシを除き、生残した全てを採集されたのと同様の生息域に放流した。

最後になりましたが、ウミウシの一部を同定下さり、さらに、仮称和名を与えて下さった濱谷 巖先生をはじめ、協力していただいた関係各位に深くお礼申し上げます。



当地の名をもつサビウライロウミウシ

表1. 展示用に収集した後鰓類 (★は展示種)

種 名	収集数	展示中の死亡数	収 集 方 法
トリス目 ★ミカドウミウシ <i>Hexabranchus sanguineus</i>	1	0	潜水(夜間)
★アオスジリュウグウミウシ <i>Tambja morosa</i>	7	0	カニ籠
★シロウミウシ <i>Chromodoris orientalis</i>	1	0	潜水
★キカモヨウミウシ <i>Chromodoris geometrica</i>	1	0	潜水
★シハンイロウミウシ(濱谷飯林) <i>Chromodoris kuniei</i>	1	0	潜水
★モモイロウミウシ(濱谷飯林) <i>Chromodoris bullocki</i>	1	0	潜水
★ハダイロウミウシ(濱谷飯林) <i>Chromodoris</i> sp.	5	2	潜水
★アオウミウシ <i>Hypselodoris festiva</i>	16	0	潜水
★クチナシイロウミウシ <i>Hypselodoris maridadilus</i>	1	0	潜水
★サビウミウシ <i>Hypselodoris purpureomaculosa</i>	1	0	潜水
★イガグリウミウシ <i>Cadlinella ornatissima</i>	1	0	潜水
★キイロウミウシ <i>Glossodoris atromarginata</i>	7	0	潜水
★ニシキウミウシ <i>Ceratosoma trilobatum</i>	5	0	潜水
★フタイロニシキウミウシ <i>Ceratosoma bicolor</i>	2	0	潜水
★ツツレウミウシ <i>Discodoris concinna</i>	3	1	磯採集
★クモガタウミウシ <i>Platydoris speciosa</i>	2	1	エビ刺網
ホソクロシタナシウミウシ <i>Dendrodoris nigra</i>	1	0	エビ刺網
ダイダイウミウシ <i>Doriopsis miniata</i>	1	0	エビ刺網
★コイボウミウシ <i>Phyllidiella pustulosa</i>	8	1	潜水
コイボウミウシ属の一種 <i>Phyllidiella</i> sp.	1	0	潜水
★キイロイボウミウシ <i>Phyllidia ocellata</i>	4	0	潜水
★タテヒダイボウミウシ <i>Phyllidia varicosa</i>	8	0	潜水
ヨツスジマダライボウミウシ(濱谷飯林) <i>Phyllidiopsis(?)</i> sp.	1	0	エビ刺網
★フリエリボウミウシ <i>Fryeria ruppelli</i>	4	0	潜水
スギノハウミウシ目 ★ユビノウハナガサウミウシ <i>Tritoniopsis elegans</i>	4	0	潜水
★シラボシスギノハウミウシ(濱谷飯林) <i>Dendronotus albopunctatus</i>	1	0	潜水
頭楯目 ★ミスガイ <i>Hydatina physis</i>	2	0	磯採集(夜間)
アメラシ目 ★ジャノメアメラシ <i>Aplysia dactylomela</i>	15	0	磯採集(夜間)
★タツナミガイ <i>Dolabella auricularia</i>	4	0	磯採集、エビ刺網
背楯目 ★ヒトエガイ <i>Umbraculum umbraculum</i>	3	0	潜水、エビ刺網
★カメノコアシエラガイ <i>Pleurobranchus hirasei</i>	1	0	潜水(夜間)
囊舌目 ★アオモウミウシ科の一種 <i>Stiligeridae</i>	1	1	展示水槽で発見

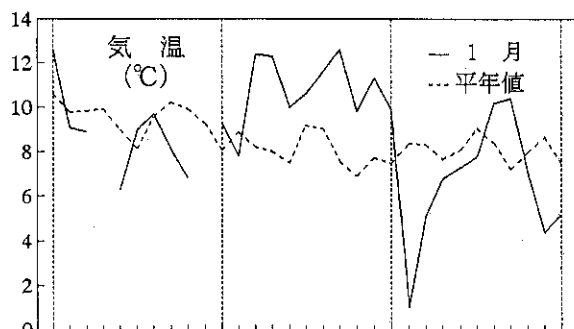
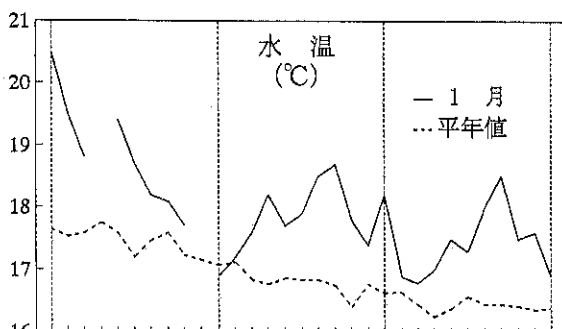
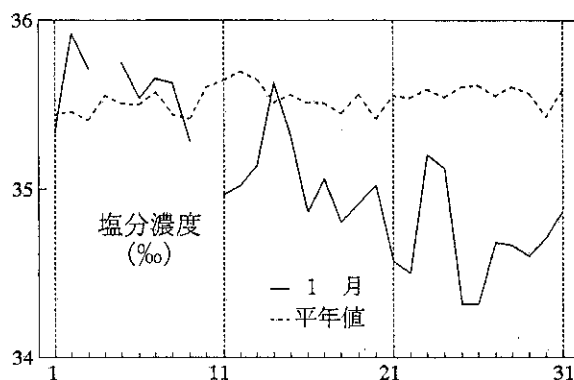
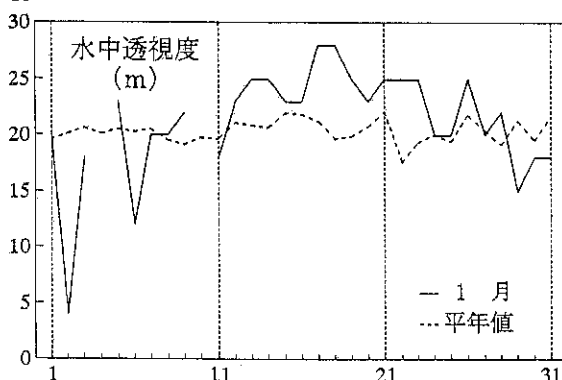
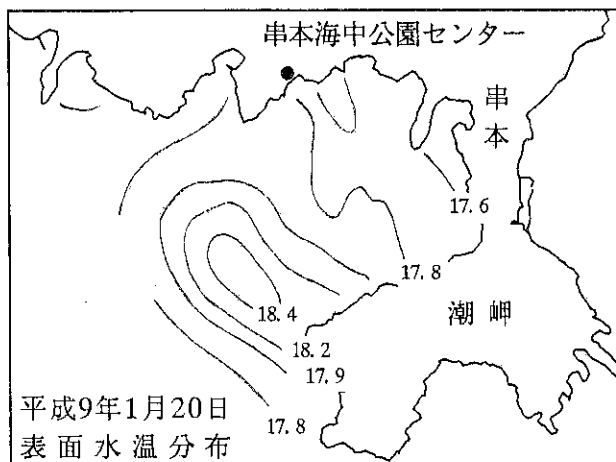
鯖浦の海から

宇井晋介

1月 平均値	気温 8.7℃	水温 18.0℃	塩分 35.1‰
	透視度 21.1 m	月間降水量 32.6 mm	

最近、近くで「鵜」の大群を見かけることが多くなった。数百羽もの鵜が一斉に水面に舞い降りて、小魚を追いかける光景は壮観だ。ただこれだけの大群になるとねぐらを探すのも大変なようで、ここ数年彼らの営巣地となっている串本町に隣接する古座町の沖に浮かぶ九龍島は、大量の糞の影響で植物が次々と枯れ、白骨のようになった巨木が無惨な姿をさらしている。人も近づかない無人島、九龍島はかつて熊野水軍

の基地となっていたという言い伝えがあり、島を縦横に走る幾つもの洞窟が面影を残す。一度も斧が入ったことのない森は、シイノキ、ウバメガシ、オオタニワタリなどが昼なお暗いほど生い茂っていたが、今は見る影もない。対策は練られているのだろうか？さりとてこのご時世、当の鵜達にも安住の地はそうやすやすと見つかるものでもないだろう。「狭い日本 そんなに言われてもどこへゆく？」



マリンパビリオン Vol. 26, No. 2 通巻 302号

1部 50円 (年間購読料 1,320円)

郵便振替口座 14740-11661831

串本海中公園マリンパビリオン係

印刷日 平成9年2月20日

発行日 平成9年2月25日

編集兼発行人

〒649-35 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157

(株) 串本海中公園センター

電話 07356 (2) 4875

印刷所

〒649-35 和歌山県西牟婁郡串本町串本2481

坂本印刷

電話 07356 (2) 0895